

## Newsletter

October 2023

<http://www.aack.info>

## 目次

ジョージア (グルジア) ・バックカントリー・  
スキーの旅、2023年3月

安仁屋政武.....1

「二つの道」サンティアゴ巡礼路と熊野古道

斎藤清明.....11

飯田肇さんに環境大臣表彰.....17

会員動向.....18

次号、107号について.....18

編集後記.....18

## ジョージア (グルジア) ・バックカントリー・スキーの旅、2023年3月

安仁屋政武

前書:えっ!?ジョージアでバックカントリー・スキー?と訝る人も多いだろう。が、考えて見れば氷河を抱く5千メートル級の山が幾つかあるコーカサス山脈の南側にある国なので、スキーができて不思議ではない。ということで2023年3月13日から24日まで楽しんで来たジョージアでのバックカントリー・スキーと観光について紹介する。

場所は、ロシアに抜ける軍用道路 (Georgian Military Road) の国境の少し手前にあるグダウリ (Gudauri) スキー場とその周辺で、標高2000m位から3200m超にある。首都トビリシ (Tbilisi) から120km、車で2時間ぐらいのところにある (図1)。ジョージアにはスキー場が3ヶ所 (Gudauri, Bakuriani, Godrdzi) あるが、Gudauri が最も規模が大きく人気が高い。

当初、この旅は2020年3月に計画された。日本からのガイドは北海道富良野在住のオーストラリア人 (彼とは2018年3月カムチャッカと一緒にいったことがある。AACK NL No. 86, Sept. 2018年) で、イギリス人のガイドから話を聞いて北海道の友人に持ちかけた。コロナで出発直前中止となったが、皆ジョージアに行きたかったので順延となった。当初からジジババ部隊であったが、3年経ち参加者6人 (内女性1人) の年齢は最高80歳、最年少74歳、

平均76.8歳となった。普段から北海道 (十勝、ニセコ界限) ・八甲田・尾瀬などで一緒に滑っている仲間で気心、スキー技術はお互いに知れ



図1 ジョージア中心部とグダウリスキー場の位置 (Georgia HP より引用・加筆改)。原図にパー縮尺、経度緯度なし。参考までにトビリシの緯度は42°43' N, 44°47' E。トビリシ〜グダウリ間は約120km。

ている。航空券は2020年の倍以上になっていた。

3月14日(火)：曇ときどき晴。トビリシ着・観光

昨夜11時頃羽田を離陸したほぼ満席のTurkish Airline TK199は、ウクライナ戦争でロシアがシベリア上空の飛行を禁止したので中国を横切りトビリシの真上を飛んで約13時間かけ、イスタンブールへ朝の5:30着陸した(日本から-6時間)。乗り継いでトビリシ着は11時前であった(日本から-5時間)。コーカサス山脈の山を見るべく左窓の席を取ったが曇っていて何も見えなかった。スキー・ガイド、ティテが出迎えてホテル Radius へ行く。

ホテルは記念塔が建つ Freedom Square の直ぐ近くにある Liberty Square の一角にある。ここは銀座4丁目に当たるような所にあるトビリシ一のショッピングセンター・ビルである。貧弱なロビーからは想像つかなかった。休む間もなく近くのジョージア料理レストランへ歩いて昼食に出かける。皆初めての経験。ヒンカリという中華料理の小籠包を2~3周り大きくしたようなものと、豚肉の切り身を焼いたものをジョージアのビールとワインで楽しんだ。ここで町のガイド、ジョージが加わり一緒に食事をする。

食事の後、旧市街の19世紀の歴史的な建物が多い街路へ行った。これらの建物は政府の法律により住民が勝手に直したり、改造したりできないそうで、最初はそのまますべて見えていたように見える建物街を歩いた。4~5階建てが多い。中には外壁は崩れ落ち、窓は破れて無くなり、バルコニーは腐って半分落ちかけているような、人が住んでいるとはとても思えないくらいボロボロのものもあった。後半は政府によって修復された建物が並ぶ小綺麗な通りを歩いた。通りの建物の壁には“ロシアくたばれ”、“プーチンくたばれ”とか“ウクライナを応援している”といった落書きが結構あった。1991年にソ連から独立した後、ロシアの侵攻を経験しているジョージア国民にとってロシアのウクライナ侵攻は人ごとではない。歩いていて気づいたのは、街はボロボロでも雰囲気は優しく、なにかのどかな気持ちであった。私にはどこか東北の街で感じるような優しさと暖かさであった。

ホテルでの夕食は20時から。皆、飛行機で

疲れているので早く食べて早く寝たかったが、ジョージアの標準的な夕食の時間は夜8時ということであった。食堂でテーブルに並んだ料理を見て、皆唖然とした。量がとてつもなく多いのである。種類も多く(5~6種?)、一つ一つの量が多い。それなりに美味しかったが、量が多すぎて手を着けられない料理も多く大量に残してしまった。飲み物はジョージア・ビールとワイン。

3月15日(水)：曇のち晴れ。ムツヘタ観光ツアー

トビリシから北西へ20kmのところにある歴史都市ムツヘタ(Mtskheta)へ観光旅行。ここはトビリシ遷都前の首都。クラ川(Kura River)沿いの道を行く途中、思いがけないことに桜が結構咲いていた。日本の桜より色が白い。種類は不明。後でガイドに聞いたところ、もともとジョージアにある種だという。最初に行ったのはムツヘタを見下ろす丘の頂上に位置するジバリ教会(Jvari Monastery)である。6世紀の物だそう。ムツヘタの世界遺産群の一つであるが、これを示す表示は一切ない(あるいは目に付かなかった?)。

教会は、今は壊れているが堅固な壁に囲まれていて、我々の教会というイメージからは違った。ジョージの説明によると、ジョージアの古い教会は僧侶達の中で暮らしていた壁に囲まれた砦/要塞だった。ジョージアはアジアとヨーロッパの交差点に位置する国なので、昔からいろいろな民族が行き来し戦争が絶えなかった。改めて陸続きの国で往来の激しい地域に位置する国の歴史に思いを馳せた。皆で、日本は島国でよかったなと言う。ガイドのジョージは考古学者で歴史にも詳しく、教会建築・装飾に関して微に入り細を穿つ説明をしてくれたが、バックグラウンドがない我々には猫に小判であった。

ここからは眼下にムツヘタの町全体が見下ろせ、中心であるスベティツホベリ大聖堂(Svetitskhoveli Cathedral、世界遺産)が一際目立っている(写真1)。右から合流するアラグヴィ川(Aragvi River)にはカヌーが浮かび、川沿いにはジョージア軍用道路が走っている。

昼前に、見下ろしていたスベティツホベリ大聖堂に到着。教会はCathedralと言うだけあって、でかい。見事な壁に囲まれていて、一見教

会(宗教施設)には見えない(写真2)。中のドームが天高く突出しているのもそれと分かる。11世紀に建てられたとのこと。ここでもジョージから建物様式など詳しい説明を受ける。興味を引いた物の一つにジョージアの Cross (十字架)がある。横の棒が両側とも30度ぐらい下へ傾いているので十字ではない(写真3)。ジョージアの宗教はキリスト教の一派であるジョージア正教(Georgian Orthodox)である。直ぐ南に位置するアルメニアに次いで、世界で2番目にキリスト教が国教になった国だそう。中庭には巨大なワイン醸造用の素焼きの瓶(1500?リットル)があった。

土産物街の一角にジョージア・コーヒーを売るスタンドがあり、その作り方が独特だった。粉のネスカフェを銅のひしゃくのような物に水で溶き、それを熱した砂の中で攪拌するように回して熱し、カップに注ぐ。

戻ったトビリシでは皆の要望で国立博物館へ行く。ジョージは、ここでは紀元前のギリシャ、ローマ、ペルシャなどのコイン等を含めいろいろな考古発掘物について熱弁をふるった。彼自身が発掘したと言うものも展示されている。私を含めてメンバーの中には他の展示物にも興味がある者もいたが、時間切れとなり人類史のところをざっと見ただけで終わってしまった。

3月16日(木):晴。トビリシーアナヌリ教会ーグダウリ

10時に出発。ロシアに繋がる2本の道路の一つであるジョージア軍用道路に行く。この道路は、ロシアに行く制裁逃れのトラックが渋滞していて国境を越えるのに2-3日かかることもある、とニューヨーク・タイムズの2月5日の日曜版が報じていた。実際、数十台の大きなトラックが塊となってあちこちの路肩に駐車していた。後から知ったが、グダウリの北にある国境検問所で、トラックは、午前中はロシアから午後はジョージアから国境を越える一方通行になっているとのことだった。

アナヌリ教会(GoogleにはAnanuri Fortress Complex、UNESCOのHPにはAnanuri fortified ensembleとある)には11:30頃到着。17世紀に建てられた世界遺産に指定されている建物で、周りの壁には銃口が付いている他、壁をよじ登る兵に石などを落とす穴などがあり、教会が当



写真1 ジバリ教会から見下ろすムツヘタの町(2023/03/15撮影)。左がクラ川、右がアラグヴィ川(グダウリから流れ下る)。道路はグダウリに行くジョージア軍用道路。



写真2 ムツヘタのスペティツホベリ大聖堂(世界遺産)(2023/03/15撮影)。壁の高さは5.5~6mか?



写真3 スペティツホベリ大聖堂にあるジョージア正教の十字架(2023/03/15撮影)。形はブドウの枝を模したとのこと。

に砦だというのを実感する。

グダウリは標高 2000m から 2150m 位の台地に位置するリゾート・タウンで、我々のホテル、カルペ・ディエム (Carpe Diem, ラテン語で、「先のことを考えないで今を楽しめ」) には 13 時頃到着。昼食はホテルのレストラン Montis で、名物のハチャプリとピZZa を赤ワインで楽しむ。

当初の計画では午後スキー場を滑る予定だったが、昼食を終えたのが 2 時半過ぎ? 遅い昼食とワイン効果と疲れていることもあり、休養に決める。ホテルの部屋はそこそこに良かった。

3 月 17 日 (金): 霧のち晴。ロミシ教会コース・バックカントリースキー (写真 4)

朝食が 8 時からで出発予定が 9 時とのことなので 2 人一部屋では結構忙しい。もっと早くしてくれと昨晚頼んだが、だめ。スキー場の北西を限るビダーラ山 (Mt. Bidara, main 3174m & lower 3011m、図 2) の西側斜面を滑るべく現地ガイド 2 人と 9 時過ぎに出る。空は霞がかっているが、スキー場のリフトの頂上は見える (Sadzele, 標高 3258m)。が、北上するにつれて霧が出てきて (我々が霧の中に入ってしまった)、道路が北東に曲がるあたりから視界がかなり悪くなった。途中のジバリ峠 (Jvari Pass, 標高 2400m 位、十字架があるので通称 Cross Pass 十字架峠とも呼ばれる) を越えたところで、ガイドのティテが車を止める。視界が悪いので、ビダーラ山は不可能。下のロミシ教会 (Lomisi Monastery) コースへと変更した。か



写真 4 スキー場のゴンドラから見たロミシ教会コース全景 (2023/03/21 撮影)。標高差約 700m。北海道十勝の三段山とほぼ同じ。施設はスキー場標高 2710m の中間点。

なり下り、基点の教会の駐車場 (標高 1485m 位) に 9:45 頃着いた。ここは晴れていて暑い! ジャケット、手袋、帽子など脱いで歩く。尾根筋の森林帯を抜けたところで休憩 (1723m)。小型の犬が 2 匹じゃれあいながらついてくる。ここで体調の関係で 1 人がリタイアを決める。若いガイド、ゲゲが付きそう。雪はかなり柔らかい。

尾根筋の斜面を登る。今回が今年のスキー初めだという O さんは標高 1850m 位の所でギブアップ。日本からのガイドが付き合う。残りの 4 人がガイドのティテと進む。標高 1975m 位の所に石の十字架があり、ここからは稜線のコルにあるロミシ教会の建物が見える (写真 5)。このコースからはグダウリスキー場がとても良く見える (写真 6)。そして我々が行こうとしていたビダーラ山の西面にはずっと霧がかかっていることが見てとれた。他は晴れているのにここだけ霧が午後になっても晴れなかった。

標高 2205m のコルの教会には 13:45 頃着いた。汗びっしょり! ここには修道士が常駐していて、教会の脇にそのための小屋がある。教会



図 2 グダウリスキー場とその周辺のバックカントリー・スキー・エリアの地形図 (Open TopoMap をベースに文中に出てくる地名等を書き込んだ)。ロミシ教会コースとシオニ谷コースの GPS トラックは黒線。



写真5 ロミシ教会への登り (2023/03/17 撮影)。コルの教会 (2205m) を見上げる。人物はガイドのティテ。写真中央近くの石の十字架は標高1975m位の所。足跡は多分、コルに常駐する修道士のもの。彼らは下る時はスキーを使うと言っていた。黒の僧服でテレマークで滑り降りる姿を想像して盛り上がった。荷揚げのためのスノーモービルの痕もあった。

を見学した後、ハーブ・ティーのご馳走にあずかる。

昼食後、14:35 分ぐらいから滑る。湿った柔らかな雪なので曲がれるか心配していたが、思ったよりも滑り易かった (写真7)。石の十字架の所で途中で止めた2人に合流し、7人で滑り降りる。最後、尾根から谷に降りる斜面は急で雪が少なく、土が露出している下部で苦労した。雪が多ければ駐車場まで滑っていけるが、標高1500m位の所でスキーを脱ぎ10分ぐらい歩く。車到着15:40頃。標高差700m程度の滑走で、十勝の三段山とほぼ同じ。我々は三段山にはホワイトアウト・横殴りの吹雪を含めいろいろな条件の時に何回も登っているのだから、ここをバックカントリー・スキーの難易度の目安としている。

夕食は今日も結果的には多すぎたので、美味しかったが残さざるを得なかった。心が痛む。ウェーターの一人に若くて背が高いひょろひょろしている者がいた。髪をちょんまげ風にまとめていたので、仲間の一人が話しかけた。日本のアニメのサムライ物が好きで真似ているという。驚いたことに新撰組に詳しく、我々日本人があまり知らないような組員も知っていた。日本文化の認知度向上・普及へのアニメの効果・貢献を改めて認識する。

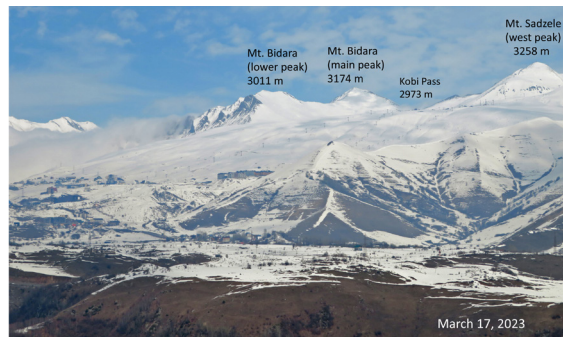


写真6 ロミシ教会コースから見たグダウリスキー場 (2023/03/17 撮影)。広大な無木立斜面が広がる。真ん中左が宿泊施設の村。真ん中中央より少し左がリゾート。標高差は1100m。手前の台地は多分熔岩台地。グダウリの集落が載っている斜面はBidaraからSadzeleに連なる山が崩壊して堆積して形成された。スキー場は山体崩壊の跡地である。



写真7 ロミシ教会コース、コルからの滑り (2023/03/17、O氏撮影)。前から3番目が筆者。

3月18日 (土) : 雪・濃霧。午前中 : ゲレンデスキー

朝起きたら曇りガスでゲレンデは見えない。地面にはうっすらと雪が積もっていた。今日はリフトを使って近隣の山を滑る予定だが、この天気では山を滑るのは無理だろうと思った。朝食(8時から)前に雪(間もなく氷っぽくなった)が降り出してきた。案の定、ガイドが来て急遽、予定をゲレンデスキーに変更する。ICリフト券は一日券が70GEL (3700円位)なので、日本よりかなり安い。半額の子供券はあるがシニア券はない。ホテル脇の高速リフトに乗る。カバー付きの6人乗りで長さは2310m、標高差は520mである。乗り場は日本と異なり吹き曝しである。ガイドの話では風はあまり吹かないようなのでこのような設備で良いのだろう。確かに雪(氷)は上から静かに降っている。終点の高度は2690m位で、視界は20~50mぐら

い。時折ホワイトアウトになった。新雪が10～15cm積もっている。暖かい！メンバーの1人にこのような状況では視力が効かない人がいて、リフトで即下山する。ガイドは周りが見えない中滑り出した。我々は前の人を目印・頼りに続くが、彼は早くて途中止まらないので見失う。皆それぞれ悪戦苦闘する。何とか下ったが、2人がこのような状況ではケガが怖いということでリタイア。

残り3人とガイド連中3人、計6人で続ける。2回目のリフト乗り場でメンバーの1人のストックが折れた。なんでもゲートの壁が倒れてきてストックを直撃し、カーボンだったのでポキッと折れたとのこと。想像つかない事故だ。上でガイドに話したら、パトロール？から1本借りてきた。リフトを乗り継いで標高3006mのクデビ山の頂上へ行く。ここから北側へ降りる上部の斜面は新雪が5cm位積もっているが凸凹で滑っていてガタガタであった。視界が悪いが、ガイドは相変わらず飛ばす。次もこのリフトに乗った。2回目は直接南側へ降りる急斜面を滑った。ここは一部にNo-trackが残っていて楽しかった。

スキー場の中間点付近にある Vitamin Café (2710m) の屋外でコーヒー・タイムにする(写真4参照)。一時視界が効いたがすぐにホワイトアウトになり、ホテルに戻ることにした。グレンデ下部の方はけっこう石が出ていたり、隠れていたりして時々ガリッとした。整地斜面では削れて土・小石が出ている所もあった。ホテル帰着12時前。現地ガイド2人を含めた滞在ホテルのレストランでの昼食は、ジョージア・ワイン、ビールでゆっくりと摂った。時間があるので食後、ホテルのプールに行き、サウナに入った。



写真8 シオニ谷入口から見るカズベク山(5054m、2023/03/19撮影)。

3月19日(日)：曇のち晴。シオニ谷バックカントリー・スキー(図2参照)

当初の計画ではカズベギの観光だったが、予報では今日は晴れるということで、ビダーラ山の西側斜面でのバックカントリー・スキーに変えた。朝起きた時、窓から覗くと真っ青な空でスキー場は全部見渡せる。予報は当たりだ！が、朝食頃高曇りとなり灰色の空になった。9時過ぎに出発。ティテの友人が参加したので現地ガイドは3人。北上するにつれ霧が出てきて視界が悪くなる。ジバリ峠近くの予定地点に着いた頃は視界が悪くとても無木立斜面でスキーができる状態ではなかった。17日と同じような状況である。即座にさらに先のシオニ谷(Sioni Valley)に行くことにする。

東に行くに従いだんだん晴れてくる。標高1940m位の車の終点には9:45頃着いた。ここは太陽が燦々と照りつけ暑い！軽装にして10時過ぎ出発。谷の取り付き点まで2kmの平坦に近い緩斜面をトラバース気味に行く。振り返るとジョージアで3番目の高峰カズベク(Mt. Kazbek, ジョージア名はムキンバルツベリ Mkinvartsveri - 5054m、高さは資料により5033m, 5047mもある)が見える(写真8)。死火山の山で頂上の形からすると、熔岩ドームだろうか。最初の流れを渡った所で体調不良の2人がリタイアを決め、若いゲゲが付き添って戻る。まもなく再び川を渡る。ここには幅1m位のスノーブリッジが1ヶ所かろうじてあった。脇には天然ガスのパイプを渡す吊橋がある(写真9)。暑くて私はすでに汗びっしょりである。スノボの若者1人が無言で追い抜いていった。



写真9 シオニ谷へ入る前の流れの横断(2023/03/19撮影)。かろうじてスノーブリッジが1ヶ所あった。左はロシアからアルメニアへ送る天然ガスのパイプを渡す吊橋。シオニ谷は左側はるか奥。先頭が現地ガイド、手前が日本からのガイド。長いアプローチ。

正面の谷の斜面には登っている3人が見えるという(私は分からなかった)。谷は無木立で真っ白である。

淡々と歩き、1回目の休みは2200m位の所(11:55～12:05)。2回目は2430m位の所で昼飯にした(13:00～13:30)。このころから空は薄曇りとなり少し冷たい風が吹き出す。ここで2人が戻ろうと言うが、もう一人はあと高度で200m位登りたいと言う。私は揺れたが登ることにした。日本からのガイドが2人と一緒に下ることにして、残り4人で標高2630m位の所まで登りシールを剥がす。汗でひんやりとする。湿雪で滑りが案じられたが、思ったより滑れた。全面No-trackだ。上越の冬の新雪であろうか。

スノー・ブリッジの所で登る時先行していた3人連れが追いつく。言葉を交わすとスイスから来たという。滑らない平地をひたすら漕いで、車に着いたのは2:45頃。滑った標高差は700m弱、アプローチの長さの割には滑り甲斐がなかった。スキー場の北側にある谷なので日が当たらず、雪質はいいとガイドブックに書いてあったが、まあまあであった。

帰りの軍用道路はトラックで混んでいてはかどらず、お陰で中国が一帶一路の一環?として建設しているトンネルの出口付近が観察できた。これはグダウリの集落が載っている台地をトンネルで抜け、難所であるジバリ峠越えを回避するための工事である。通行はトラックに限る計画とのこと。ジバリ峠近くで滑る予定だったピダーラ山の西面が見えた。真っ白な斜面でとても魅力的であるが、視界が相当良くないと滑れないだろう。ホテルに戻ったのは3:40頃。メンバーの部屋で集まり、ビール、ワインで歓談する。ここに着いてから暖かい日が続いていて、北海道の4～5月の春スキーだなどと言う。

### 3月20日(月):雪/雨。カズベギ観光

朝起きた時は曇りであったが朝食前に雪が降り始めた。トビリシから来たジョージと共に10時過ぎにカズベギ(Kazbegi, これはロシア語名、ジョージア語名はシュテパンツミンデ Stepantsminda)の観光に出発。この頃、雪が激しく降るようになったが、北上するにつれて小降りとなり2400mのジバリ峠を越えて高度が下がり始めると雨に変わった。カズベギの手前でジョージアで一番長いトンネル(11km)を通る。

11時頃、町の対岸の山の頂上に立つ世界遺産のゲルティ・トリニティー・教会(Gerti Trinity Church, 別のスペル、Gelati Trinity Church)に着く。天国に一番近い教会として知られているそう(写真10)。観光客がほとんどいないこの時期にこんな所でと意外だったことは、15人ぐらいのタイ人の賑やかな団体観光客と一緒に、その内の一人、中年の女性がバンコクの日本大使館で働いていたことがあると言って日本語を喋ったことである。ここからカズベギ氷河に取り付く道がある。天気が良ければ氷河上部とカズベク山が見えるそう。ここからは対岸の町カズベギが眼下に一望で改めて要塞(砦)の機能を実感する(写真11)。

教会建物の壁の装飾の一つに、得体の知れない動物が描かれている。草食恐竜の首を短くして長い尻尾を上丸めたような体型である。ジョージは、コーカサス山中で目撃されている



写真10 ゲルティ・トリニティー・教会を見上げる(2023/03/20撮影)。



写真11 ゲルティ・トリニティー・教会から見下ろしたカズベギの町(2023/03/20撮影)。テレク川(右から左へ流れている)の両岸に緩傾斜の斜面が広がる。森の所は山地崩壊の堆積物による高まり。

謎の生き物だと言う。彼自身も仲間と一緒に夜目撃したことがある、と微に入り細を穿った説明をした。

次にロシア国境の検問所ラース (Lars) があるダリアリ (Dariali) へ行った。トラックの渋滞はなかった。検問所は川がゴルジュになっている所にある (写真12)。ここにあるダリアリ教会 (Dariali Monastery) のワイン・セラーを見学・試飲し、美味いということで皆買う。1本30GEL, 1600円位で決して安くはない。カズベギに戻り、昼食。ハチャプリ、ヒンカリ、チャカプリなど。ラグナービール (Ragnar beer) は美味しかった。ジョージアの焼酎、チャチャ (Chacha) も試飲した。ブドウ酒を蒸留したもので、40～50度ぐらいの透明な酒である。残ったヒンカリは揚げて出てきた。ジョージアの大人、男はヒンカリを15個ぐらい、女性は10個ぐらいビールで食べるのが標準とか！私たちは4～5個でかなり腹一杯になった。3時頃外に出たら土砂降りの雨。シオニの町を過ぎた標高2000m位付近から雪に変わった。ホテル帰着は3:50頃。

3月21日(火):快晴。午前中:ゲレンデスキー、午後:グダウリートピリシ

雲一つ無い青空。ここへ来て初めて。が、7時頃?空が白くなり雪面と区別がつきにくくなった。最後の日なので、皆でスキー場からゴンドラでコビ峠 (Kobi Pass) を北に越えたコビ谷を滑りたいというリクエストを出した (図2参照)。最初にホテル脇のリフトで上がりゲレンデを滑り降りてゴンドラ乗り場へ行く。空が白いので、ホワイトアウトではないが地面が見づらい。ガイドは新雪が積もっている斜面ではなく整地したコースを例によってスピードに乗って滑った。驚いたことに整地したコースは凍っていてその上に少し (5～10cm?) 新雪が載っている状態であった。ガイドが早く滑るのでついて行くのにスピード・コントロールが大変で、足に大きな負担がかかった。なんとかゴンドラ乗り場まで滑り降りたが、2人は切り上げてホテルへ戻った。

残り4人がガイド連中と中間点へ行くゴンドラに乗り、さらに乗り継いでクデビ山を滑った。その後 Kobi-Gudauri Gondola でコビ峠に行く。峠着 10:50 頃。標高 2971m。この頃までに天気

は良くなり、降りたら真っ青な空をバックにカズベク山が見事に見え、写真を撮りまくる (写真13)。結構人がいる。まもなくガイド2人が追いつく。7人でコビ谷を滑る。規模が大きい。標高差は約700m。遮るものが全くない。雪はまあまあである。ゴンドラでコビ峠まで戻る (写真14)。シオニ谷では700m滑るのにほぼ1日



写真12 ロシアとの国境検問所ラース (Lars) (2023/03/20撮影)。心配したが、特に警備が厳しいとの印象はなかった。



写真13 コビ峠から見たカズベク山 (2023/03/21撮影)。一際高く (5054m)、シオニ谷から見た (写真8) のと印象が異なる。



写真14 ゴンドラ (10人乗り) から見たコビ峠とコビ谷のスキー場 (2023/03/21撮影)。一応整地したコースがあるが、どこでも滑れる。真ん中付近にケシ粒のような6人が見えるので、広大さが分かる。





写真 15 グダウリ・スキー場上部 (2023/03/21)。スキー場中間点 (2710m) 付近から撮影した2枚を合成。左:ピダーラ山 (3170m)、真ん中:サドゼレ・リフト (3260m)、右:クデビ山 (3006m)。どこでも滑れる。

がかりであった。もちろん、ここには滑った痕がたくさんあるが、午前なので踏んでないところも結構あった。2回目は右にかなりトラバースしてあまり踏まれていない谷の東側の山の斜面を滑る。帰りは登るとき使ったゴンドラで中間地点 (2700m 位) まで降りる (写真4を参照)。目の前にロミシ教会コースの全体が見える。滑り降りたのはここから。ホテル着は12時半頃。トビリシへの出発を2時としてシャワーを浴び荷造りをした。

この日初めて視界が利きスキー場全てが見渡せたので、その大きさが実感できた (写真15)。HPによると開設は1987年で、ソ連から独立の前である。コースの距離が75km (別のHPでは57kmと様々) とあるが、どこでも滑れるのでどこをどのように計測したのだろうか。トビリシから日帰りのツアーもある。標高は2150mから3260mにわたる。リフトが10基、ゴンドラが4基あり、6人乗りの一番長いリフトは2750m (標高差500m)、次が我々が乗った2310m (標高差520m)、ゴンドラが2380m (標高差540m) である。コビ谷のゴンドラは1520m (標高差700m) である。無木立なので雪があればどこでも自由に滑れるが (もちろん降雪直後はナダレに注意)、今回場所によっては小石が出ていたり下に隠れていたりして注意が必要だった。コースと称する所は幅20~30mの一応整地している所である。ヘリスキーもあるそうだが、我々の滞在中は見なかった。

皆の荷造りが早く終わったので13:45頃出発。途中、昼食とタイヤのパンクでトビリシのホテル着は5時半頃。夕食まで休む。

3月22日 (水):曇ときどき晴。トビリシ観光

10時頃、ガイドのジョージと会い、土産を買いに行く。店の反対側の壁にはロシア、プーチンを揶揄するようなポスターが所狭しと貼られている (写真16)。荷物を置きにホテルへ戻ってから、昼過ぎに昔ドイツ人が住んでいた街とワイン・セラーのツアーに出かける。ランチはSaarbrücken Bridgeを渡った所にあるTiflis (Tbilisiの昔の名前) という店に入った。橋の名前からしてドイツ語である。この橋の袂、クラ川右岸の歩道は中古品や一部新品の路上販売店がたくさんあり、賑わっていた。軍服、鉄兜、勲章その他戦争の記念品も多数出品されている。

昼食後、Wine Galleryという店に行った。ここはジョージア産のみ1500本 (あるいは種?) 以上のワインを販売していて、様々なワインの試飲ができる。地下には貯蔵タンクとピアノがある試飲室がある。この後、昔ドイツ人が多く住んでいたという通りを歩く。ガイドの建物とそれにまつわる話の説明は細かいが、例によって馬耳東風だ。歩き疲れて、帰りは市営バスに乗る。乗客の1人がマスクを着けていた (見た唯一)。

それにしてもガイドのジョージは話し好きで話がつきない。それを日本からのガイドが適当に訳す。皆でよく口が疲れないと話す。若い時はコーカサスの山々を精力的に登ったそうで、スキー・ガイドのティテはシオニ谷の登り口で、目の前の4千メートル級の岩峰を彼と登った (初登頂?) と話した。彼はトビリシ国



写真 16 ロシアのウクライナ侵攻を非難し、ロシア、プーチンを揶揄するポスター (2023/03/22 撮影)。黒枠は別の写真から切り取って貼り付けたもの。'ロシアはテロリスト国家' という類のポスターは他にもたくさんあった。プーチンを豚に擬えたものには皆笑った。ヒトラーに擬えたのは2枚あった (Putler)。チングスハンもある。Bloodymir は彼の first name, Vladimir を振ったもの。Achtung は彼が核を使うことを懸念している。左下の地図はジョージアの2つの行政区 (South Ossetia- 中央、Abkhazia- 左上) がロシアによって制圧・実効支配されていることを示す。ジョージア国民のロシアに対する感情が量り知れる。

立大学の考古・歴史? の先生ただただあり、知識が豊富でしかも饒舌であった。日本の歴史にも通じていて、所々で披露した。ロシアとの戦争にも5回従事したとのこと。アメリカ大使館に警備で14年間務めた経験もあるという。彼がガイドした場所は一般的な観光地ではなかった。建物の歴史に詳しく、それにまつわるエピソードをいろいろと交えて話してくれたが、バックグラウンドが無い我々には「猫に小判」の感も免れなかった。メンバーの1人としては名物のフニクラあるいはロープウェイでトビリシの街を俯瞰する丘の上のナリカラ要塞にも行ってみたかった。

夕食はメンバーの1人の強い要望で、観光繁華街の外れにある踊りと歌のレストランに歩いて行った。早かったので、客は地元の4~5人連れの中年男達だけですでに酒が入っていて大声で喋っている。かなりうるさい。そのうち、ダンスフロアで女性1人のダンスが始まった。雰囲気なんとなくトルコっぽい。ステージで男女の歌もあった。8時を過ぎた頃から地元の客がちらほら来はじめた。ここの従業員は誰も英語を話さない。支払は現金のみ。カードはダメという経験は他でもした。今時観光地では珍しい。

夕食後、ホテルが少し遠いのと風邪気味の者もいたのでタクシー2台で帰った。翌朝ガイドのジョージにタクシー代の相場を聞いたら、4~6倍の値段をぼったくられていたことが分かった。最後の最後でやられた! 因みにタクシーにはメーターがなかった。

ジョージアは治安が悪いから気を付けろという情報があったが、それまで幸いなことにいやな経験はしなかった。むしろ、人は愛想ないが“優しいな”という印象を持っていた。ジョージアの治安について2020年には外務省から美人局でボラれないようにとの注意が出ていた。今回も滞在中にエイジェントから、1人歩きはしないほうがいい、との注意が入っていた。帰ってから写真整理の参考にとジョージアに関するHPを見ていたら、ジョージアの治安の悪さを訴えたものがあった。2021年にカズベク山に登りに来たグループがキャンプのテントで就寝中に、登山用具、書類、現金、カメラ、コンピューターなど一切切切を盗まれたという。警察に届けたが、なんと盗まれた方が悪いというような態度で相手にされなかったようだ。

3月23日(木):曇。トビリシ帰国

出発前の朝、急遽 Visit Japan Web で日本入国の手続きをした(が、なぜか入国の時機能しなかった)。トビリシ空港はこぢんまりとした空港なので混雑はない。イスタンブール行きのTK379は12:20頃離陸。イスタンブール着13:30 (Georgia Time, 14:30)。免税店でジョージア・ワインが売られていたら手荷物で持ち帰ろうと考えていたが、成田行きTK50までの乗り継ぎの時間が1時間足らずしかなかったので、残念ながらチェックできなかった。帰りの成田便は満席。約10時間のフライト。真ん中の列の真ん中、窮屈だった。成田着24日朝の8:10。札幌便に乗り継ぐ人もいて、ばらばらに解散。

雑感

今回の旅は3年越しであった。1年目が中止・順延になった時は行くのを止めようかと考えたこともあったが、キープした。コーカサスでバックカントリー・スキーというのに加えて、料理が日本人の口に合うという定評があり、ワイン発祥の地とも言われているジョージアという国にも少なからず興味があった。このような機会

でないと行かないだろう。季節的なこともあるのか、雪は期待していた程ではなかったが、一応滑るのには問題なかった。天気には恵まれなかったようだ。標高2千メートルから3千メートル超ということで、寒いのを想定していたが暖かく、薄手のウィンドブレーカーも持って行くべきだった。

スキー・ガイドのティテは陽気な中年男で、スキーの教師もやっているそうだ。彼はジョージア国民でバックカントリー・スキーをやるのは数十人（あるいは数百人だったか？いずれにしても約370万人の人口に対して圧倒的に少ない）位しかいないだろう、と言っていた。我々がグダウリに滞在していた時バックカントリー・スキーヤーに会ったのはシオニ谷でのスイスから来た3人、ボーダーが1人（不明）だけであった。スキー場の主な客はロシア人とイスラエル人だという。我々のホテルにも泊まっていた。

日本語の観光案内ではXX教会と紹介されている施設の多くは英語ではmonastery（多くの場合修道院と訳される）と記されている。因みにChurchとMonasteryを辞書で見たら、簡単には前者は、牧師は普段別の場所に住んでいて礼拝の時に施設に来て務める、とある。後者は、牧師・僧侶は教会と同じ敷地に普段住んでいて生活を送っている、とある。従ってmonasteryには敷地を囲う壁がある。我々が見た古い教会には皆壁があった。ということで、xx Monasteryと呼ばれているのだろう。

スキー場とその周辺の地形が面白い。まず、グダウリの集落とスキー場がある所は、巨大山体崩壊の堆積物からなる斜面と台地である。堆積物の下は熔岩のようである。噴火で熔岩台地が形成された後、ビダーラ、サドゼレ、クデビの山が大規模崩壊を起こしたと考えられる。

グダウリからカズベギに行く軍用道路の最高点ジバリ峠は谷中分水界で、北東側はビダーラ川の流域でテレク（Terek）川に合流してコーカサス山脈を横切りロシアに流れ込む。南西側は国内のアラグヴィ川へ流れる（図2参照）。テレク川沿いには合流する支流の出口に扇状の緩傾斜で平らな斜面が存在している（写真11を参照）。ここは狭い谷にあって居住・耕作に適した場所となっている。

最初の谷中分水界はここがかつて氷河に覆われていたことを示している。渓流の谷口に位置する扇状の緩斜面は、堆積物を確認する必要があるがおそらく古デルタと推察できる。つまりビダーラ川-テレク川がかつて湖で、ここに流入する渓流が湖にデルタを形成した。その後湖は消滅してデルタが地表に現れ、現在見るような開析デルタとなった。川を堰止め湖を形成した要因として、この地域では斜面崩壊による土砂ダムとカズベギ氷河による堰止の2つが考えられるが、カズベギの扇状面の分布と位置からは氷河堰止湖とは考え難い。詳しくは省くが、グーグル画像とOpen TopoMapの地形図を参考にすると、カズベギから少し下流のTsdoの集落が載っている面を形成した崩壊が川を堰止めたのではないかと推察する。

P.S. 日本からのガイドがこの旅のビデオを短く（10:36）まとめてYouTubeにアップした。URLは（<https://youtu.be/hLcGhX6Bi68>）。ジョージアに興味がある人には参考になるだろう。ビデオの中でスキーガイドをタイテと言っているが、これはTiteの英語発音。現地ではティテと呼んでいた。またガズベク山をジョージア最高峰と言っているが、東ジョージアの最高峰で、国では3番目。

## 「二つの道」サンティアゴ巡礼路と熊野古道

斎藤清明

本誌100号に、安仁屋政武さんが「サンティアゴ巡礼-フランスルート」を執筆している。2019年9月から10月にかけて764kmを34日間で歩いた記録である。

この、スペイン北西部にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂（カセドラル）への

巡礼路には、いろんなルートがあり、私は今年4月、「イギリス人の道」と「地の果て」フィステラ岬までの計200km余を9日間で歩いた。その様子を、熊野古道との「二つの道の巡礼者」にもふれて記したい。

## イギリス人の道

サンティアゴ巡礼は、中世から続いており(熊野参詣も同じころから)、ヨーロッパ各地からさまざまなルートがある。有名なのが「フランス人の道」で、ピレネーを越えてスペイン北部を通っている。テレビや映画、本などで、よく紹介される。そのほか、ビスケー湾沿いの「北の道」、スペイン南部セビージャからの「銀の道」、リスボンからの「ポルトガルの道」などと。そして、かつては船でやってきたのが「イギリス人の道」である。

イギリス、アイルランド、スカンジナビアなどから海路による巡礼者は、ビスケー湾岸に上陸し、サンティアゴ・デ・コンポステーラに向かった。12世紀ごろから始まり、カトリック教会と袂を分かって英国国教会ができる16世紀半ばまでが最盛期だったという。今日では、スペイン西北部の港町フェロールから南下していくルートが「イギリス人の道」になっている。歩く距離は約115km。巡礼証明書を入手できる最短コースといえる。リアス海岸沿いから内陸部へ、4～6日間の行程になる。

私は、コロナ渦前からサンティアゴ巡礼に興味をもってしたが、「フランス人の道」は長距離なので(最後の100km以上を歩けば巡礼証明書をもらえるのだが)シンドイな。「イギリス人の道」なら、喜寿をすぎた身でも歩けるだろうと、気軽にかんがえて出かけていった。

4月5日(水)。関西空港から出発。カタール航空でマドリッドへ。荷物は機内持ち込み7kgに抑えた。寝袋はやめてカバーのみ、ストックは1本、予備食なしなど、と。

マドリッド空港からサンティアゴ行バスで9時間かかって、スペイン北西部のア・コルーニャで下車。ローマ帝国時代からの「ヘラクレスの塔」(世界遺産の灯台)を見て、列車でフェロールに移動(途中、事故でバスに乗り換えた)。

ヨットがたくさん係留している波止場の近くに観光インフォメーションがあり、そこがCamino Ingles(イギリス人の道)の起点。持参した熊野古道との共通巡礼手帳(クレデンシャル)にスタンプをもらう。列車で一緒だったスペイン人青年二人組がスマホ撮影してくれた。彼らはすぐに先行していったが、3日後の宿で再会し、一緒にサンティアゴに到着することになる。

この日(7日)は聖金曜日で、街の広場で宗教行事が催されていた。パレードもあり、それを眺めつつ、モホン(標識)をたどった。カミーノ(巡礼路)は湾に沿って奥まで入っていくが、途中で対岸に渡る車道があった。関空を出てから休みなしで来た初日なので、大事をとって近道をとることにする。釣り人も歩いている側道で橋を渡った。そして、またモホンに出会う。さっそく、近くのバール(食堂)で生ビール。

湾内やフェロール市街を見渡ししながら、住宅地から郊外へと、緩やかな山道を越えていく。ポンテデウメの手前の橋まで来て、ホッとするが、果たしてアルベルゲ(巡礼宿)にベッドは空いているだろうか。

午後4時45分、Albergue de peregrinos de Pontedeume着。先客はフランス人青年ひとりだけ。受付は観光案内所のインフォメーションだと、案内してくれた。このアルベルゲは波止場に面した漁業倉庫の内部を二階造りに改装したもの。20ベッド(先着順)。共用のシャワーとトイレがある。この旅で初めてのシャワーは熱かった。洗濯して外に干す。カップ麺を洗面所の熱湯を使って食べ、ひとごちついた。ぶ厚い毛布が備えてあり、ありがたい。市営なので5ユーロ(他のガリシア州営は8ユーロだった)。夕方遅く、もう一人青年が来て、その夜は3人だけ。フェロールでは「巡礼者」を多く見かけたが、民営アルベルゲやホテル泊りが多



写真1 モホン(標識)を辿って行く

いようだ。まだ巡礼シーズン前でもある。

8日(土)。快晴(午後は暑かった)。パンとスープで朝食していると、フランス青年は起床してすぐ、短パン姿で出発していった(この後、会うことはなかった)。私は午前7時に出発したが、まだ暗い。4月から夏時間ということで、日の出は8時過ぎなのだ(日没もかなり遅く、午後9時ごろでも明るい)。

街灯を頼りに、石畳の坂道を上っていき、市街地を出ると、田園地帯になった。月明かりのなかを行く。青紫の空が明けてきて、遠景も広がり、美しい。農村や、ユーカリ林、ゴルフ場を抜けて、カミーノが続いていく。車道にも沿って進んだ。9時半、この日最初のバールがあった。生ハムを挟んだパンにオレンジジュースがうまい(6ユーロ)。次々に後続がやってきたが、なんと荷物を次の宿に託送して空身で歩く連中もいる。

湾岸沿いに進み、ミーノの食料品店でパンとバナナを買う。街路のベンチで休憩中に追い抜かれたスウェーデン人夫婦に聞くと、今日はベザンソスまでだという。こちらも、まあそんなところか。鉄道線路を越え、岸边におりたところが自然保護区で、眺めがいい。また休憩。その間にも空身の数組が先行していった。

ハイウェイの橋脚の下を巻いて、入り江沿いに進んだ後、山越になる。峠には、無人の記念品売り場もあった。遠くにベザンソスの町並みが見え、ピッチをあげて下った。石造りの橋を渡り、城壁の門をくぐると、教会がそびえる広場に出た。

巡礼アプリ Gronze で公営アルベルグを探し、行き着いたが、営業していない。周辺を歩き廻っているうち、目の前にアルベルグの看板があった。その民営の Albergue Santa Maria del Azogue にする。まだ新しくきれいだ。先客はなく、シャワーを浴び、洗濯。食料品店で缶ビール、生ハム、パン、リンゴを仕入れてきて、ひとりで乾杯。夕遅く、フランス人母娘が到着した。

9日(日)。晴れ。6時半に宿を出たのはいいが、市街地から出たところで、モホンを見失った。車道をしばらくたどって、磁石で方向を確認。わき道に入ったところで街灯の傍にモホンを見つけ、ホッとする。その地道の坂を上がり、林に沿っていく。やがて、日の出。9時すぎにバー

ルを見つけて朝飯。次々に後続がやってきた。

車道に沿ったり離れたりしながら行く。民家の木々、草花が色とりどりで、気持ちがいい。次のバールでは、自転車ツーリング組が飲んだので、こちらも生ビール。ア・コニューラからのカミーノが合流したので、巡礼者が増えてきた(ア・コニューラからサンティアゴ間は100km未満で、地元民以外は巡礼証明書はもらえないはずだが)。午後2時40分、ブルマの公営アルベルグに着いた。この日、28kmを38000歩で歩いた。

近くの食堂で巡礼定食。ガリシア風野菜スープ、チキン、デザート、そしてビールで12ユーロ。別室では村人らが宴会をしていた。食後、村はずれの教会墓地のモホンで、サンティアゴまであと40kmだと確認する。夜、また食堂でワインを飲む。

10日(月)。霧が出て、月明かりもないが、7時出発。ポルトガル女性二人組が先に行く。明けてくるころ、十字架が立つ古風な水場を通過。聖者や恐竜(近くで骨を発掘するようだ)のオブジェが道端に並んでいた。10kmほど行って休んだバールで、2日前の宿で一緒のフランス人母娘に会う。カミーノ沿い民家の花樹がきれい、ジャクナゲも植わっている。菜の花畑も広がる。畑の土起こし時期なので、馬糞の臭いが漂ってくる。

車道に沿って、逆行して来る男がいた(翌日も会う。3日後にはカセドラル前で)。地元の歩こう会のメンバーようだ。ロバを引いた老人にもあった。四国遍路の逆打ちのようで、おもしろい。パウロ村のバールで生ビール。店の前にバスが停車していた。乗れば、サンチャゴま



写真2 ロバを連れた巡礼に会った

で1時間ほどだろう。

孫息子と祖父母など、家族連れ巡礼グループも目立ってきた。6kmごとに水場があるはずなので、次の休憩地にしようとおもったら、水道はなくて水浴場だった。そこで、ポルトガル女性組に追い付いた。マルタとリタと互いに名乗りあい、一緒に行くことにする。今夜泊まるシグエイロには公営アルベルゲはないので、彼女たちが予定の民営の Albergue Camino Real に付いていった。

町に入って中心街のビルの一階にあり、フェロール出発時に先行していった青年二人がいた。二段ベッドだが、寝具つき。キッチン・ラウンジもあった。近くのスーパーで、赤ワイン、生ハム、リンゴなど仕入れて、互いに乾杯する。明日はカセドラルだ。

11日(火)。7時出発。五人揃って(昨夜遅く着いた若い女性客は起きてこなかった)。市街地を出て、畑地に沿って行く。霧がかかって、月明かりはなく、街灯が頼りだ。鳥の鳴き声が心地よい。ユーカリ林を抜け、地道から車道沿いになる。通勤の車も増えてきた。そうして、また市街地に入っていく。

ずっと休まずに歩む。石畳の街路になり、カセドラルの塔が見えてきた。足取りが次第に早くなる。石造りの大きな方形建物(サン・マルティン・ピナリオ教会)前を通り、物乞いやバグパイブ吹きがたむろする門をくぐると、オブラロイド広場だった。午前11時10分に到着。大聖堂(カセドラル)が目の前にそびえている。

写真を撮りあい、マルタが5人を自撮りする。喜びがわいてくる。広場には、抱き合って喜ぶ巡礼者がたくさんいる。観光客も多い。

巡礼事務所へ、リタが先導してパラドール・ホテルの前を通って行った。巡礼証明書の受付は、スマホでデータを入れる仕組み。私がまごまごしていると、係員がモニター画面でやってくれた。受付番号票を手に奥の部屋へ。撮影は禁止。クレデンシャルとパスポートを提出。フェロール出発日を確認し、宿をチェック。そのあと、名前を記入した証明書を出してくれた。縦型の巡礼証明書と横型の距離証明書(フェロールから115キロと記入)。手数料は3ユーロ。

ここで5人は別れた。名残惜しいが、私は熊野古道との「二つの道の巡礼者」証明書を入手に、市観光局に行く。マルタとリタはすぐにポ



写真3 カセドラル前で

ルトガルに帰るといふ(往路はリスボン・マドリッド・コルーニャと空路だったそうだ)。

スペイン青年二人とはその夕、メノール神学校のアルベルゲで再会した。このアルベルゲは、古い大きな建物の内部を宿泊用に改装したもので、たくさん泊まっていた。台湾女性や韓国青年ら、カミーノで初めて東洋人を見かけた。

### 地の果て、フィステラの道

スペインの最西端にある岬フィステラは、「地の果て」を意味している(ヨーロッパ大陸の最西端はポルトガルのロカ岬だが)。かつては、巡礼の締めくくりには海で身を清め、身に着けてきた衣類を燃やし、夕陽を眺め、自らの過去に別れを告げたという。今日でも「フィステラの道」は、人気のある巡礼路のようだ(バスでサンティアゴから数時間で行けるのだが)。

12日(水)。曇り。午前8時、宿のメノール・アルベルゲを出て、カセドラルへ。子どもらの登校など、街はにぎわい始めていた。オブラロイド広場で、また逆打ちオジサンと出会った。フィステラに行くというと、激励された。

カセドラルを背に、パラドール前からまっすぐ西へ、街中を抜けていく。サン・ロレンソ公園のモホンに、フィステラ89586m、ムシア86482mと記していた(その後は、フィステラまでの距離表示だけとなる)。郊外に出るところで、モホンに気づかず石畳に沿って行ってしまい、地元のオジサンに声かけられて引き返す。地道をたどってから振り返ると、カセドラルが望めた。

サンティアゴへ向かうツアーがやってきた。早朝にホテルから車で来て、歩いて帰って巡礼

気分を味わうのだろう。出会ったのはこの日だけで、たいてい、フィステラやムシアから数日かけてサンティアゴに向かっていった。すれ違った米国在住のコリアン女性は、「ポルトガル人の道」を9日間で歩いたのち、バスでフィステラに行き、歩いて戻っているのだと話していった。

緩やかなアップダウンが続き、畑や林もあり、村々を抜けていく。やっと見つけたパールで朝食（コーヒー、卵ケーキ、パン。3.6ユーロ）にしたが、もう昼飯だ。後続も次々にやってきた。ここでも、荷物は託送して手ぶらの女性たちがいた。

川べりの町に出て、石造りの橋を渡る。小さな滝もある。午後3時半、ネグレイラの町に入り、まずホテルのテラスで生ビール。スーパーで買物して、町はずれの公営アルベルゲへ。22ベッドあり、先着順だ。8ユーロ。この日の泊りは10人。

13日(木)。紫明の朝もやのなか、7時半出発。カミーノは車道を外れ、林の中へと続いていく。次の村で日の出になり、雲海も望む。村々を抜けているうち、風力発電の風車が並ぶ丘陵地になった。その麓を巻くように進む。

にわか雨になる。しかも向かい風。風力発電地帯だから、風はさらに強くなるかもしれない。対向の巡礼者もゴアテックス雨具姿だ。ピラセリオ村のパールで朝食(6.5ユーロ)。パンケーキ2枚がボリュームがあって、夕方まで腹ももった。

Vilar del Castroの丘(標高420m)の展望は、曇り空のなか、広々として、北方にダム湖、西には林立する風車が見えた。「イギリス人の道」で会った父娘組が先に下っていく。なかなか追いつかず、道を間違えたのかと不安になる。麓の集落のバス停で婆さんがカミーノの方向を指さしてくれ、ホッとする。

オルベイロア村に入ると、民営アルベルゲのテラスで父娘組が手を振って迎えてくれた。公営はその先にあり、ネグレイラで同宿組はすでに到着してベッドを確保済み。管理人は午後6時半にやってきた。チェックインし、クレデンシャルにスタンプをもらう。石造り2棟で古風だが、設備は整っていた。ただ、電気暖房パネルは、シュラフカバーだけの身には寒かった。

近くの食堂で巡礼者定食。スープ、パン、チキン、プディング、コーヒー。11ユーロ。そ

して生ビール(2ユーロ)。ガリシア風野菜スープに温まった。この日は、いちばんの長距離、34kmをしのいだ。明日は、海岸に出れるはずだ。

14日(金)。雨のなか、8時出発。雨具のズボンも穿いて白ずくめなので、お遍路さんみたいだ。1時間ほどで、オ・ロゴソ村。パールで朝食(コーヒーと揚げパン。3.3ユーロ)。ゆっくり食べながら、今日は港町セーまでにしようかと決める。

林のなかを、緩やかにアップダウンしていき、車道にでると、ムシアとの分岐。地道をゆっくり下っていき、狼男のモニュメントには驚かされる。車道からまた草原状になり、ネベの聖母教会に寄る。スタンプを押してくれた。

雨がやみ、海が見えてきた。セーの町に入る。広い港がある。午後2時、カミーノ沿いの民営アルベルゲに入る。先客は女性ひとり。40人収容の大部屋の隅このベッドにする(15ユーロ)。この日は20km歩いたから、あと16kmだ。

15日(土)。晴れ。先客は「ブエンカミーノ」とつぶやいて出発した。こちらはゆっくりと食べ、午前8時すぎに出発。車道からカミーノに入ると、民家のホタテ貝の装飾が歓迎してくれた。地道をたどって、11時すぎ、海辺に出た。フィステラの街や先端の岬も見える。目の前には、大西洋が広がる。

カミーノは海岸に沿って、遊歩道のように続く。夏は海水浴客で賑わうのだろう。海岸から車道に上がって、フィステラへの街に入る。中心部にあるインフォメーション兼公営アルベルゲに行ったが、閉まっている。近くのパールに、PAZ(平和の意味)という名のアルベルゲの看板があったので、そこに決める。2泊で30ユー

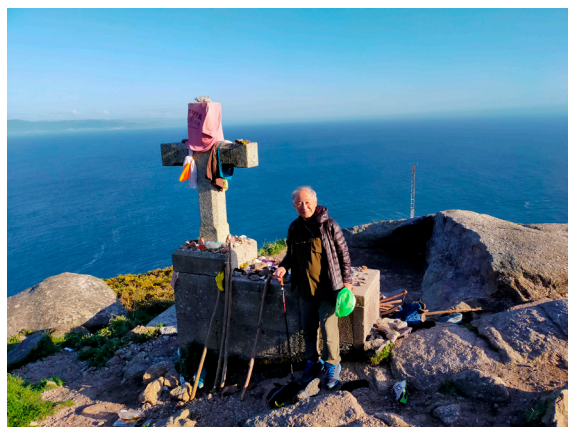


写真4 大西洋を背に、フィステラ岬で

口。港を眺めながら、生ビール。宿のオーナーが一杯おごってくれた。

夕方、岬に向かった。海岸を見下ろしながら、ゆっくりと坂道をたどってフィステラ岬に着いた。0m表示になったモホンのところで、サンティアゴの宿で同室だったイタリアのオジサン3人組に会い、スマホ撮影してくれた。さらに、灯台よりも先端にある十字架まで下ってみた。まさに、地の果て。ついに、来た。

日没を待つ。なかなか陽が沈まず、海面が光るだけ。灯台に明かりが入った。午後8時40分、宿に帰ることにする。真っ赤な夕日にはならなかったが。

16日(日)。快晴。早朝からカモメが鳴いている。8時過ぎ、海辺に出て日の出をみる。今日はもう歩かなくてもいい。9日間で200km余り、よく歩いたものだ。

明朝のバス乗り場を確認し、インフォメーションに行く。歩いてフィステラにきた証明書をもろう(無料)。浜辺に行き、ホタテ貝を拾い、大西洋の広がりを実感する。そうして、カモメの鳴き声につつまれた海辺の町で、のんびり過ごした。

17日(月)。晴れ。バスで2時間余り、サンティアゴに戻った。駅近くの民営アルベルゲに荷物を置いて、カセドラルへ急いだ。

正午からの巡礼者ミサに間に合った。椅子席はいっぱい。観光客も多い。1時間余り続いた最後に、ポタフメイロ。高い天井から吊り下げた大きな香炉が、燻されて振り回される。オルガン演奏付き。これは、見ものだった。半地下に安置されている聖ヤコブの棺を拝む。その後、パラドールのテラスで、まばゆい陽を浴びながら生ビール。到着する巡礼者を眺めながら。そう、喜んで座り込む光景はいいものだ。

18日(火)。晴れ。特急列車でマドリッドへ。中心部のホテルにチェックイン。午後6時から無料のプラド美術館で名画に再会した。

19日(水)。早朝、王宮の近くにある、サンティアゴ巡礼「マドリッドの道」起点のサンティアゴ教会に参る。そして、空港へ。20日夜、関空に着いた。

## 熊野古道

私は熊野に生まれ育ったので、熊野三山(本宮大社、速玉大社、那智大社)などが「紀伊山

地の霊場と参詣道」として世界遺産登録されるずっと前から、いわゆる熊野古道に親しんでいた(熊野古道とは、まだそれほど言われていなかった)。海岸沿いの大辺路は、わが町(和歌山県串本町)を通っているのだから。高校生になって山歩きを始めたころ、大雲取越えをして、石畳が残っているのに感動したものだ。

この、熊野古道にもサンティアゴ巡礼路のように、いくつもルートがある。中世の上皇や貴族の熊野詣にもっぱら利用されたのが中辺路で、今日の熊野古道歩きでも人気のコースになっている。沿道には「王子」と呼ばれる社や遺跡がある。いっぽう、高野山から1000m級の峠を三つ越えていくのが小辺路で、紀伊半島南部の山なみを楽しめる。海辺の大辺路や伊勢路もある。さらに、吉野と熊野を結ぶ修験道の大峯奥駈道も熊野古道になっているが、これは登山者向けだ。私は4年前に、弥山(1895m)から笠捨山(1352m)までの大峰山系を、無人小屋を利用して5日間で歩いた。

さて、サンティアゴ巡礼路は1993年にユネスコの世界文化遺産登録されている(2015年には拡大登録)。その後2004年に熊野古道が登録され、「道」の世界遺産が二つになった。そこで、熊野古道の地元、田辺市がわの働きかけで、「二つの道の巡礼者」(Dual Pilgrims)が2015年から始まった。

サンティアゴ巡礼路と熊野古道という「二つの道」達成者に、証明書と記念バッジが渡される。その条件は、サンティアゴ巡礼路では最後の100km以上歩いて巡礼事務所で証明スタンプを得ること。熊野古道では、中辺路を滝尻王子から本宮大社まで(38km)か、那智大社から大雲取越え本宮大社まで(30km)か、高野山から小辺路を本宮大社まで(70km)かのうち、いずれかを徒歩で行くことなど。

この企画は、サンティアゴ巡礼を済ませた外国人巡礼者になかなか好評のようだ。多数の登録者があることが、田辺市熊野ツーリストビューローHPから読み取れる。

共通巡礼手帳というものもある。片面が熊野古道、もう片面がサンティアゴ巡礼用のスタンプ台紙となっている。私は昨秋、本宮大社前の世界遺産熊野本宮館で入手し、サンティアゴ巡礼のクレデンシャルとして使った。

そうして、「イギリス人の道」を終えて巡礼



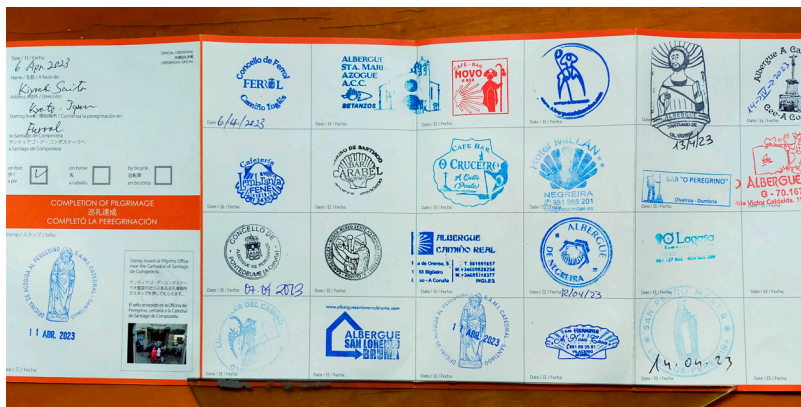


写真5 巡礼手帳（サンティアゴ巡礼のスタンプ）



写真6 共通巡礼手帳の熊野古道スタンプ

事務所で証明書をもたらしたその足で、カセドラルの裏側にある同市観光局インフォメーションに行った。にこやかに対応され、ピンバッジと和紙の証明書を渡してくれた。ウェブサイト顔写真を載せましようといわれたが、それは遠慮させてもらった。

私には信仰心があつてのことではなく、山歩

きのつづきとして、たんに「歩く」ということでのサンティアゴ巡礼だった。それでも、「二つの道の巡礼者」とは、なんとなくいい感じがする。もっとも、二つの巡礼のシンボルであるホタテ貝と八咫鳥（やたがらす）をあしらったピンバッジを胸に付け、フィステラ岬に向かって歩いて途中、紛失してしまったのだが。

## 飯田肇さんに環境大臣表彰

飯田 肇さんが、令和5年度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受けられました。たいへんおめでとうございます。

環境省ウェブサイトによりますと、表彰の目的は「自然環境の保全に関して顕著な功績があった者（又は団体）を表彰し、これを讃えるとともに、自然環境の保全について国民の認識を深めるもの」とあります。飯田さんはその中

で「調査・学術研究部門」の「自然環境の保全・創造や自然とのふれあいに関する調査、研究で顕著な功績がある者」として表彰されました。

功績の概要として、「昭和53年より、日本には氷河が存在しないといわれていた時代に、観測機器の発達を受けて精密な継続的な観測を行い、氷河であることを実証したと同時に、気候変動に関わる気象の急激な変化の様相などを

山岳ガイドや登山者に啓発、気象遭難の防止に務める等、氷河等の調査・研究活動に尽力」(同サイト)とあります。

飯田さんは東京理科大学から名古屋大学大学院に進学、これまで氷河・雪氷研究にいそしんでこられました。ヒマラヤの氷河調査隊に何度も参加される一方で、日本山岳会の日本・ネパールカンチェンジュンガ登山隊(1984)、同日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊(1992)に気象担当として参加され、的確な天気予報で登山の成功に貢献されました。

飯田さんには、今回の表彰の対象となった

功績の一つ、「日本の氷河」研究について、AACK Newsletterに以下の2回、解説記事を書いていただきました。

No.69, 1-4 (2014)「立山・剣岳の多年性雪渓と氷河」

No.96, 3-9 (2021)「日本の現存氷河」

現在は立山カルデラ砂防博物館の学芸課長をお務めの傍ら、日本雪氷学会北信越支部監事や日本山岳会副会長などの要職にもついておられます。ますますのご活躍をお祈りいたします。

(編集人 横山宏太郎)

## 会員動向

### 訃報

村上正康 2023年9月16日逝去

### 会員異動

川口康平 勤務先変更  
中川 潔 電話番号変更  
藤澤道子 自宅住所変更  
勤務先削除  
松本保博 自宅住所変更  
山田和人 自宅住所変更

## 次号、107号について

当初、106号は堀了平さん追悼を中心に発行の予定でした。しかしその編集作業に時間がかかる見通しになったので、すでにいただいていた安仁屋さんと斎藤さんの原稿を主として106号を発行しました。

通常の編集日程からは遅れていますが、107号はなるべく早く発行したいと思います。つきましては、107号では通常のように締め切り日を示しません。掲載したい原稿をお持ちの方は編集人・横山宛になるべく早くお知らせください。よろしく願いいたします。

原稿送り先：横山宏太郎

## 編集後記

たいへん遅くなりましたが、106号をお届けします。

安仁屋政武さんには、ジョージアの山スキーという珍しい報告をいただきました。Covid19での延期を経て実施された由、熱意に感服です。

斎藤清明さんからは、スペインのサンティアゴ巡礼のおはなしです。熊野古道とあわせて「二つの道」達成、おめでとうございます。

先輩お二人の行動力にはただ感心するばかりで、なかなかまねも出来ませんが、さらなるご活躍(とご寄稿)を楽しみにしています。

飯田肇さんは、立山周辺を紹介するテレビ番組にはよく登場されていますから、ご覧になった方も多くことでしょう。長年の活動が評価されての表彰、たいへんおめでとうございます。

今年夏ごろから、山の遭難事故、なかでも登山道から転落とされているケースが多いようで気になります。自分も気を付けなければ、と思っています。

横山宏太郎

発行日	2023年10月30日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町1-8 (株)土倉事務所